黒熊中西遺跡（高崎市）

黒熊中西遺跡全景（東方から）

「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

↓

遺跡位置図

← 黒丸が黒熊中西遺跡

「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

吉井南陽ゴルフコース
吉井CC
富岡CC
多胡碑
上信電鉄
吉井
254
福島
金井
吉井町神保
吉井町矢田
白石
中大塚
藤岡IC
藤岡JCT
17
森
上栗須
上越新幹線
群馬藤岡
甘楽
吉井IC
藤岡GC
甘楽CC
関越ハイランドGC
鮎川
根岸
藤岡
小幡郷GC
三名湖
関口
グリーンパークCC
川除
ツインレイクスCC
甘楽町
天引
塙保己一旧宅
小幡

川内
吉井町石神
吉井町小串
吉井東コミュニティセンター
吉井町矢田
吉井町深沢
白石
254
上谷戸
白石
吉井町黒熊
吉井町多比良
JA
藤岡ゴルフクラブ
NEOMAX機工
緑埜
竹沼貯水池
41
90

↓

→

上信越自動車道建設にあたって埋文調査が行われた

この先が上信越自動車道でその向こうの木々の裏が藤岡ゴルフクラブとなっている

高速道路の高架橋/前方の木々の裏が藤岡ゴルフクラブ

高架橋から東方向を見る

高架橋から西方向を見る

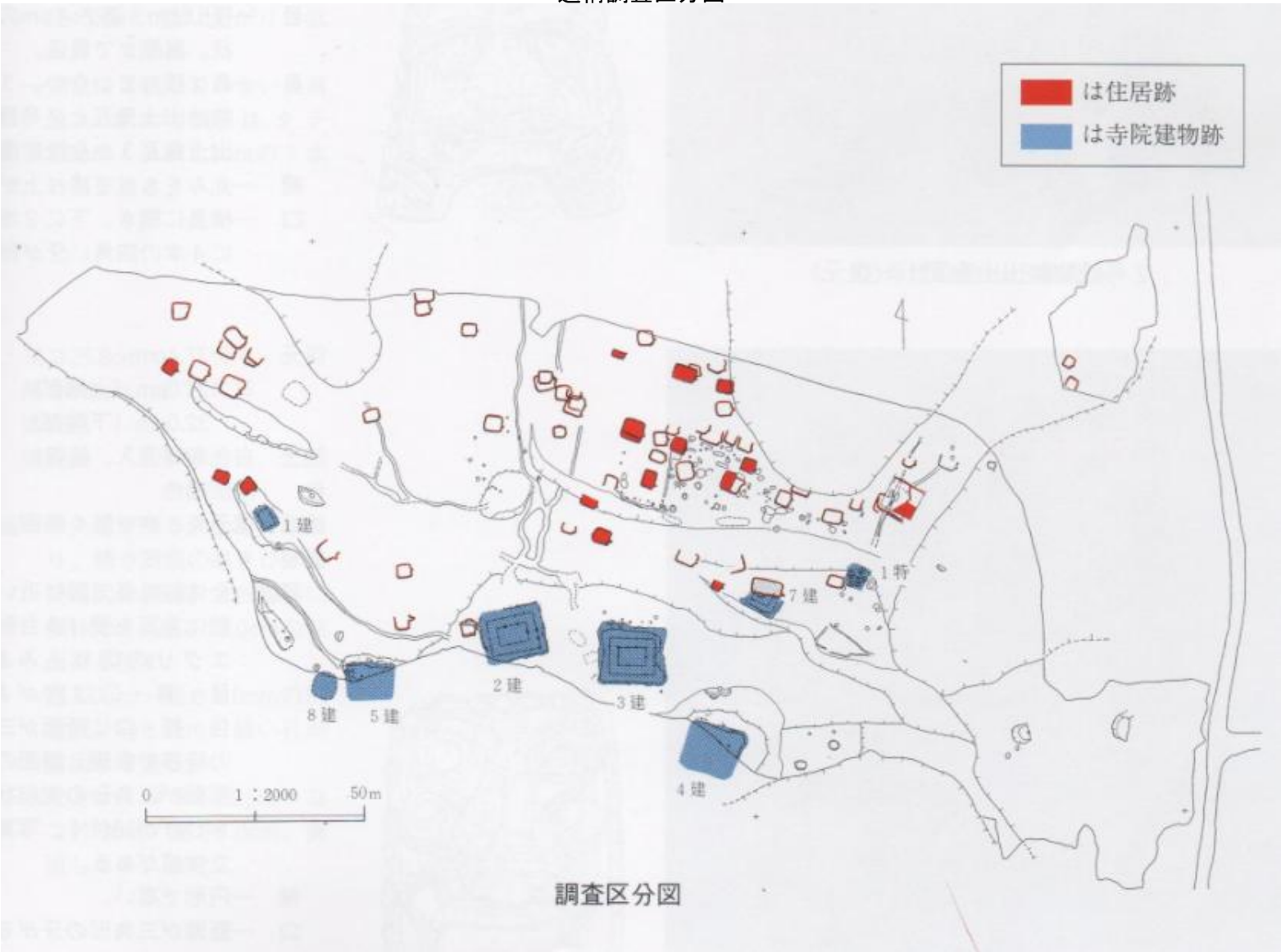
高架橋が見える/黒熊中西遺跡は埋文調査後、高速道路の下になっている

現在の黒熊中西遺跡（西方から）

「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

高速道路付近から254号線方向を見る

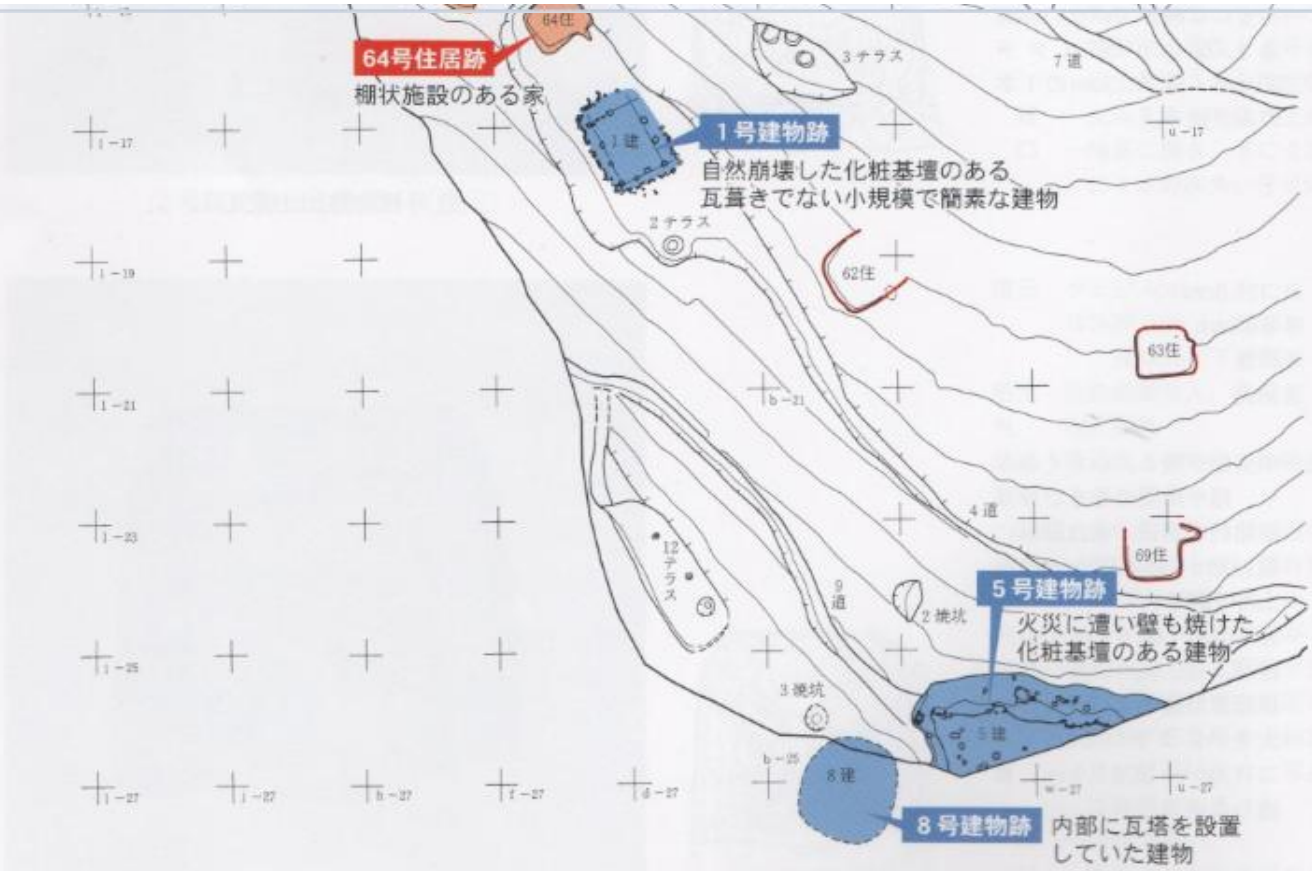
遺構調査区分図



「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

遺構配置図（1）

H区
G区
17住
最大の出土遺物量を誇る土器が
大量投棄された
「生」墨書土器も出土した家
22号住居跡
22住
23住
18住
19住
20住
21住
50住
3遺物集積
7テラス
53住
6住
27住
3道
65号住居跡
棚状施設のある家の隣の家
65住



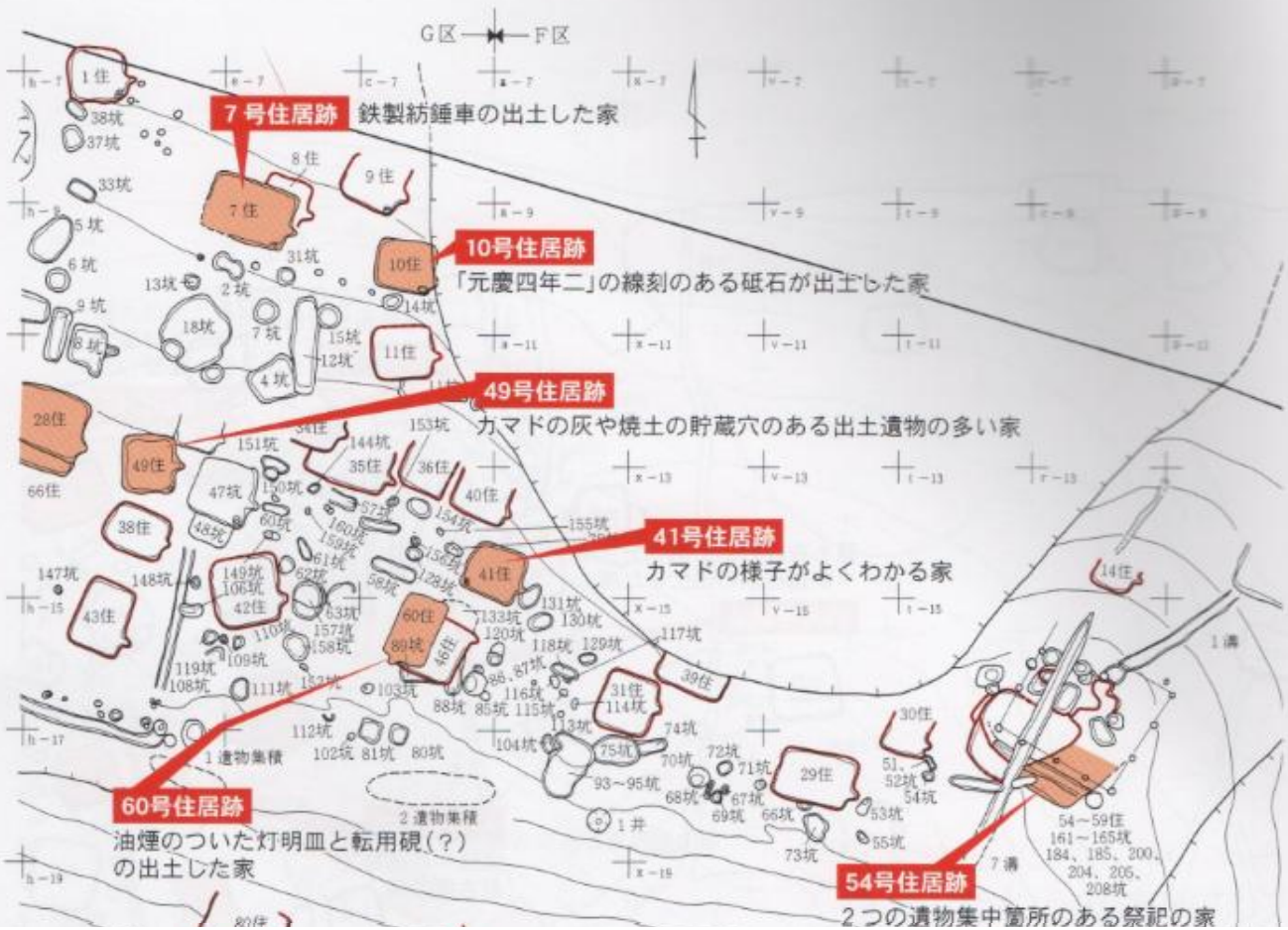
「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

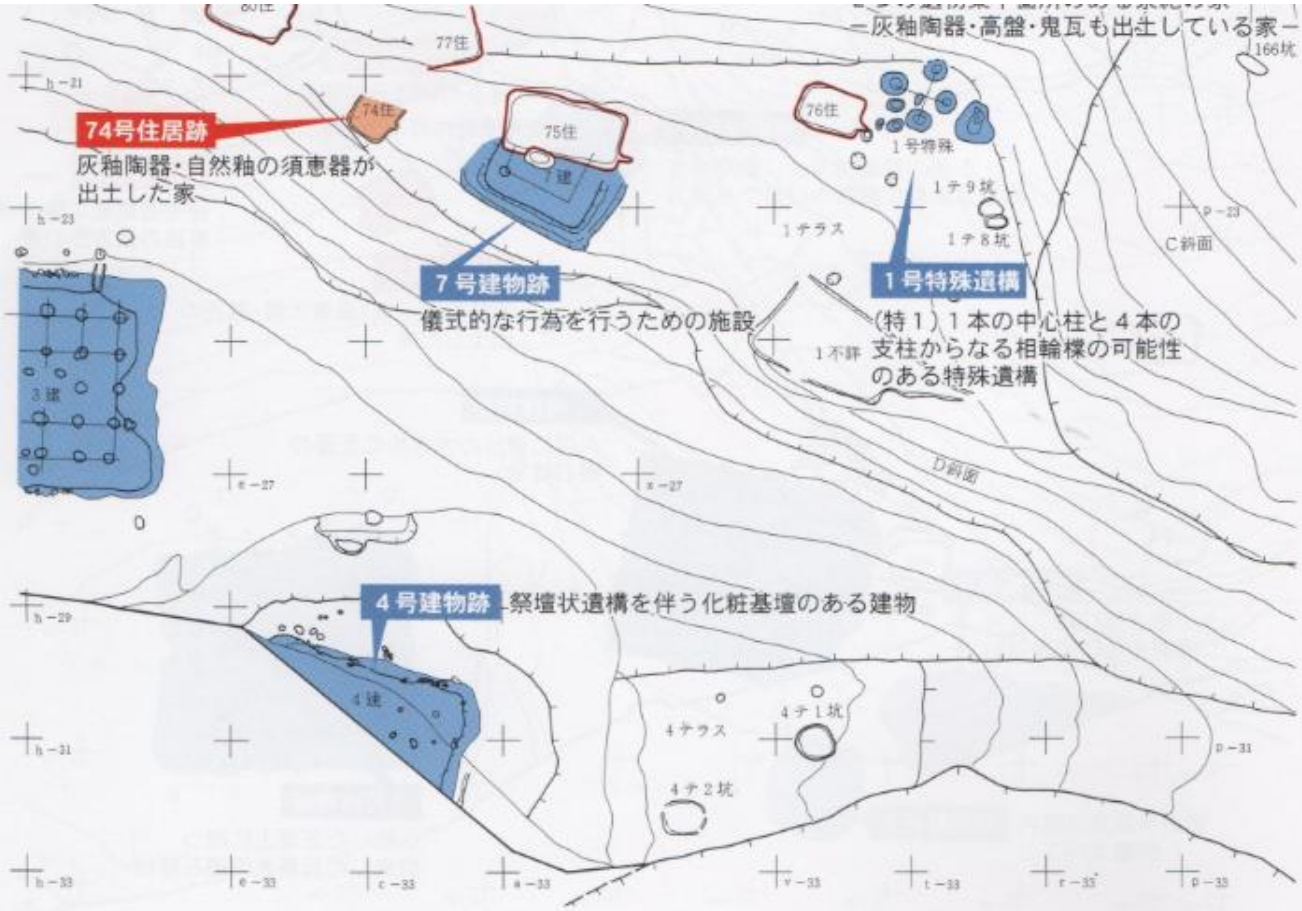
遺構配置図（2）

カマドにかかったままの
羽釜が出土した家
12号住居跡
最も寺院的出土遺物
ー銅製経軸の出土した家
28号住居跡
47号住居跡
黒熊中西遺跡で
最古級の家

「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

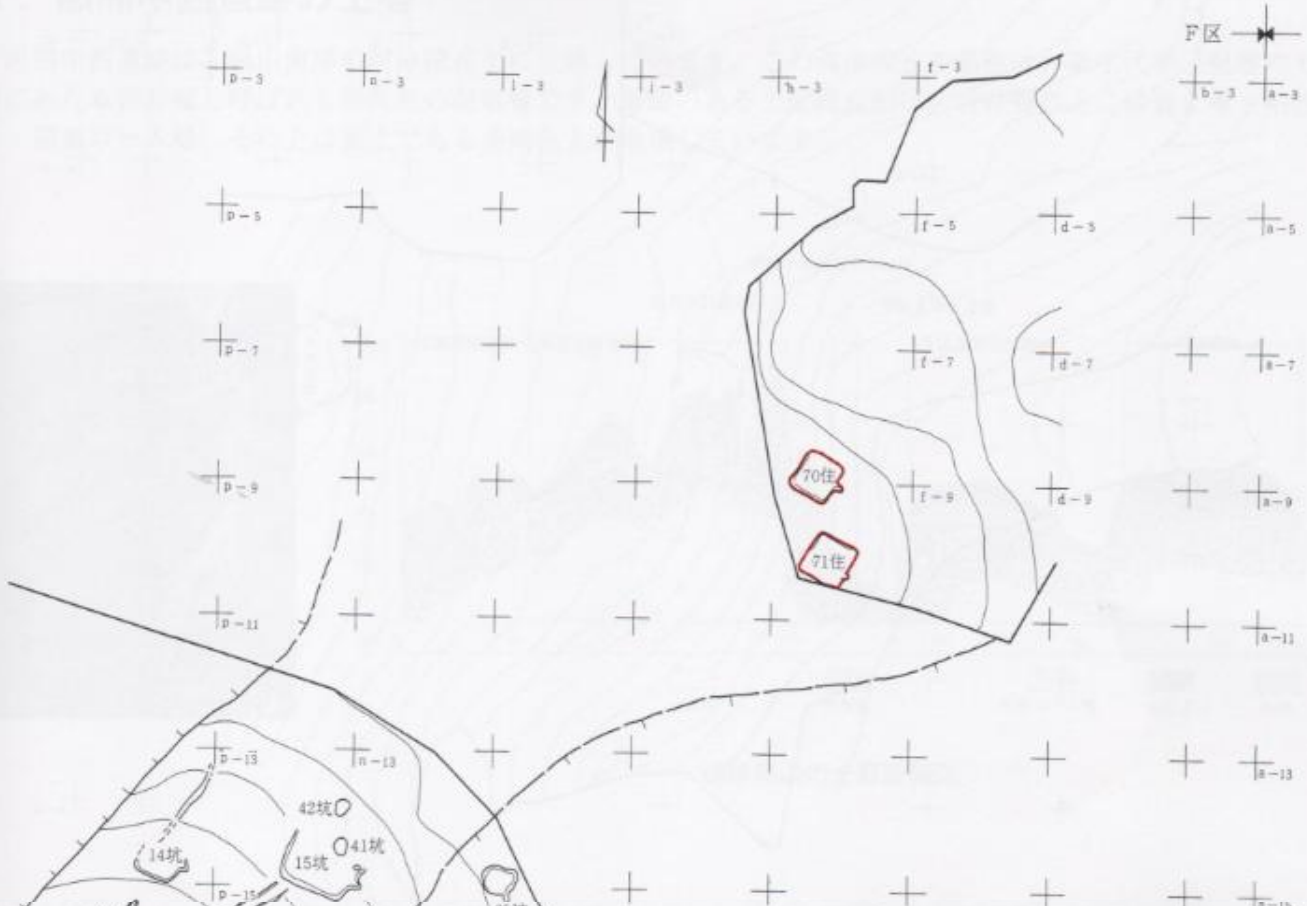
遺構配置図（3）

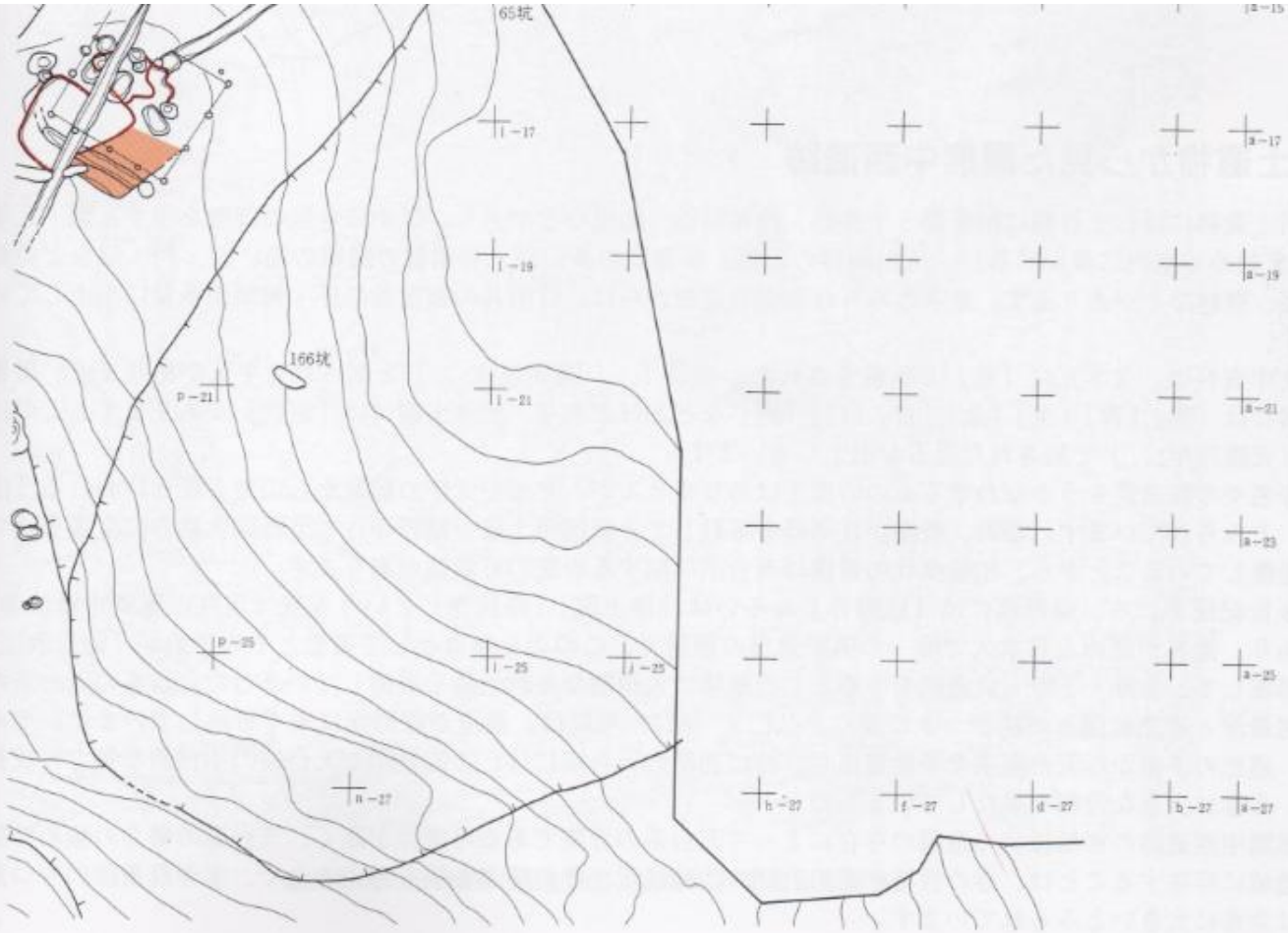

G区
F区
7号住居跡
鉄製紡錘車の出土した家
10号住居跡
「元慶四年二」の線刻のある砥石が出土した家
49号住居跡
カマドの灰や焼土の貯蔵穴のある出土遺物の多い家
41号住居跡
カマドの様子がよくわかる家
60号住居跡
油煙のついた灯明皿と転用硯（？）
の出土した家
54号住居跡
２つの遺物集中箇所のある祭祀の家



「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

遺構配置図（4）





「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

鬼瓦が出土している

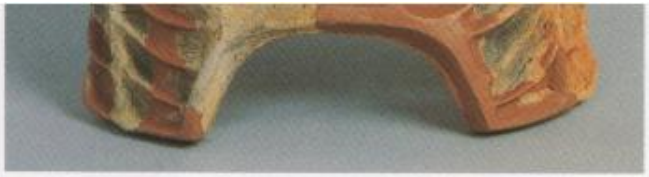
鬼瓦（おにがわら）

黒熊中西遺跡の鬼瓦は、９世紀中頃あるいは10世紀前半から11世紀ごろまで存在していた平安時代の寺院の屋根に飾られていたものです。「鬼」は魔よけの意味で使われましたが、魔物に対抗できるのは、やはり魔物である鬼と考えられました。この鬼瓦には、寺の中に入ろうとする魔物の侵入を防ぐおまじないの意味があったとみられています。

平安時代中ごろ、「鬼」の文字は「もの」「かみ」「しこ」と読まれていました。「おに」は「穏」がなまったものといわれ、もともと隠れて姿を見せようとしない疫鬼（えきき）、モノノケ、死霊（しりょう）（隠れる＝死ぬ）や精・神霊（しんれい）などのことで、『日本書紀』には「邪鬼（あしきもの）」や「姦鬼（かたましきもの）」などの古い記録があります。中国の「鬼（き）」という死霊も姿を見せないところが共通していることから、日本の「穏」と同じものと考えられました。

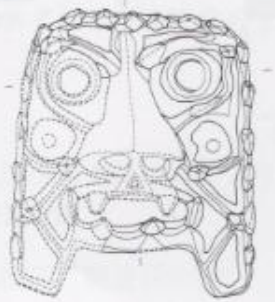
「おに」の虎の皮のふんどしや牛に似た二本の角などの特徴ある姿も、不吉な方角とされる鬼門の丑寅（うしとら）（東北）の方角からきていると考えられます。また、鬼につき物の金棒は鉄をつくるシンボルともいわれ、青や赤の体の色は鉄や金属をつくるのにかかせない炉の炎の色であるという説もあります。

復元　タテ40.3cm
　　ヨコ35.3cm（下端部）
胎土　小礫混入
色　　淡灰褐色から橙色
焼成　不完全な還元、やや軟質
表現
　顔面―全体が逆Ｕ字状形。下部中央に丸瓦を受ける半円状のエグリの切り込みあり。口の輪郭・ひげ・顔面の周囲の巻きひげ・目の輪郭・眉は隆帯で表現。
　目　―径5.5cm・高さ４cmの円柱状。裏面まで貫通。



2号建物跡出土鬼瓦1（復元）

鼻　―鼻は残っていない。3号建物跡出土鬼瓦と2号建物跡出土鬼瓦3から推定復元。
頬　―丸みをもって盛り上がる。
口　―横長に開き、下に2本、上に4本の四角い牙が付く。



3号建物跡出土鬼瓦（復元）

復元　タテ37.4cm
　　ヨコ27.0cm（上端部）
　　32.0cm（下端部）
胎土　白色細礫混入、粗雑
色　　淡灰褐色
焼成　還元炎、やや堅く緻密
表現
顔面―全体的に長方形に近い。下部に丸瓦を受ける台形状のエグリの切り込みあり。目・鼻・口は穴があく。目・頬・口は断面が三角形の隆帯で表現。顔面の縁に断面が三角形の突起状の巻きひげが18付く。写実的で立体感がある。
頬　―円形で高い。
口　―断面が三角形の牙が6本付く。

「多胡郡　古代寺院の素顔―黒熊中西遺跡―」より

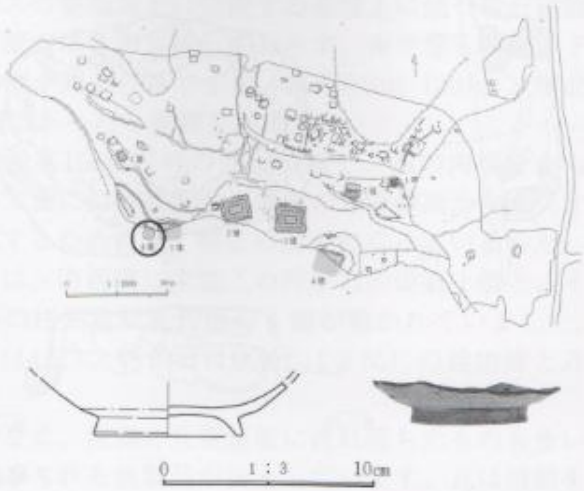
瓦塔も出土している

8号建物跡　内部に瓦塔を設置していた建物

8号建物跡は、頂部からわずかに西に寄ったところにあります。尾根に沿った東側には5号建物跡が隣接しています。

8号建物跡は、盛土の裾が調査区にかかったもので、主要部は調査区外にあります。盛土は、北東に下る斜面に盛られており、盛土の土留めであるかと思われる落ち込んだ土坑が2基と柱穴がありました。

8号建物跡に伴う遺物はありませんが、北側の丘陵斜面や5号建物跡、8号建物跡と5号建物跡を隔てる9号溝などに8号建物跡から落下したとみられる瓦塔の大部分が出土しています。9号溝の西1mのところには、8号建物跡に付帯するとみられる焼土坑があり、8号建物跡の盛土下の土坑からは、須恵器の椀が出土しています。



8号建物跡出土遺物

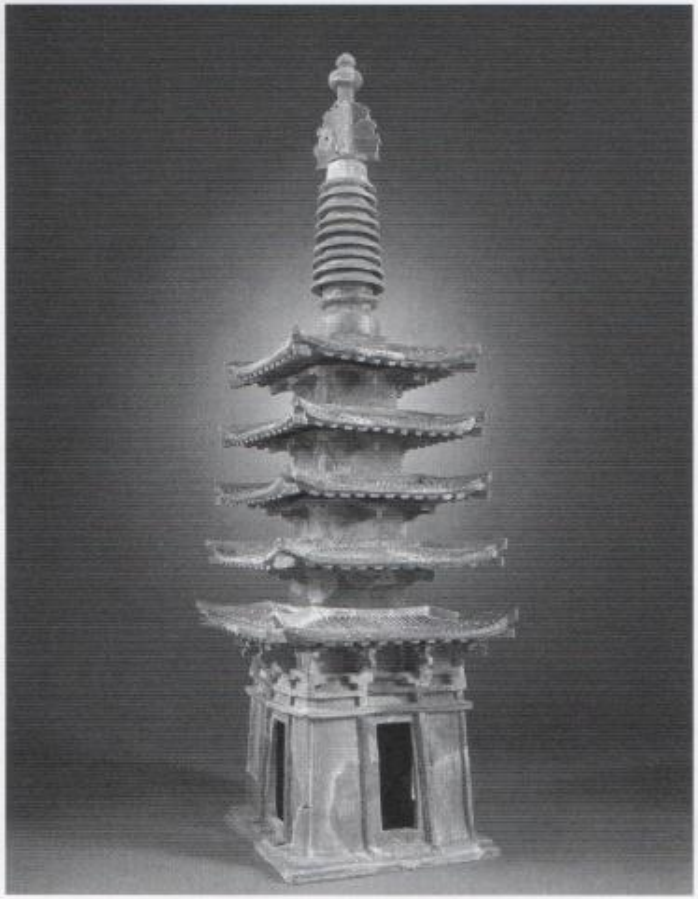
瓦　塔

瓦塔は、25片ほどの小破片が散乱して出土しました。瓦部品には、質感が異なるものがあり、別個体の可能性も推測されます。同一個体とみられるものは、瓦（丸瓦）が5段に表現され、垂木は方形1段が削り出しによって表現されています。相輪部は残存しておらず、竜車かとみられる径1.5cmほどの円球状の土製品1個が出土しています。

瓦塔は9世紀後半頃のものとみられ、総高は150cm前後、全体的に簡略的で、他の遺跡の瓦塔に比べてやや小ぶりです。

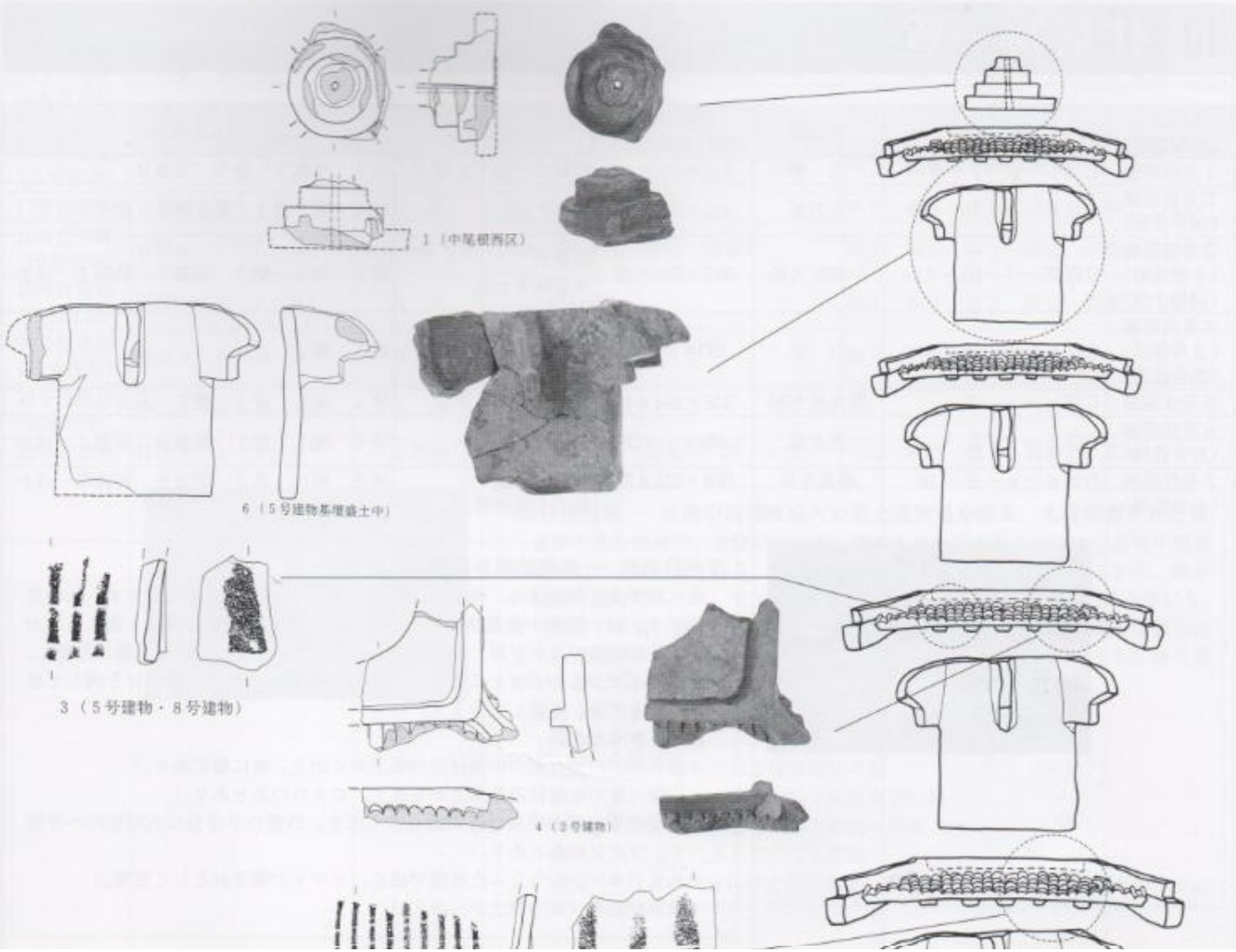
8号建物跡は、盛土の一部のみが確認されているだけですので、建物とテラスのいずれかの可能性がありま

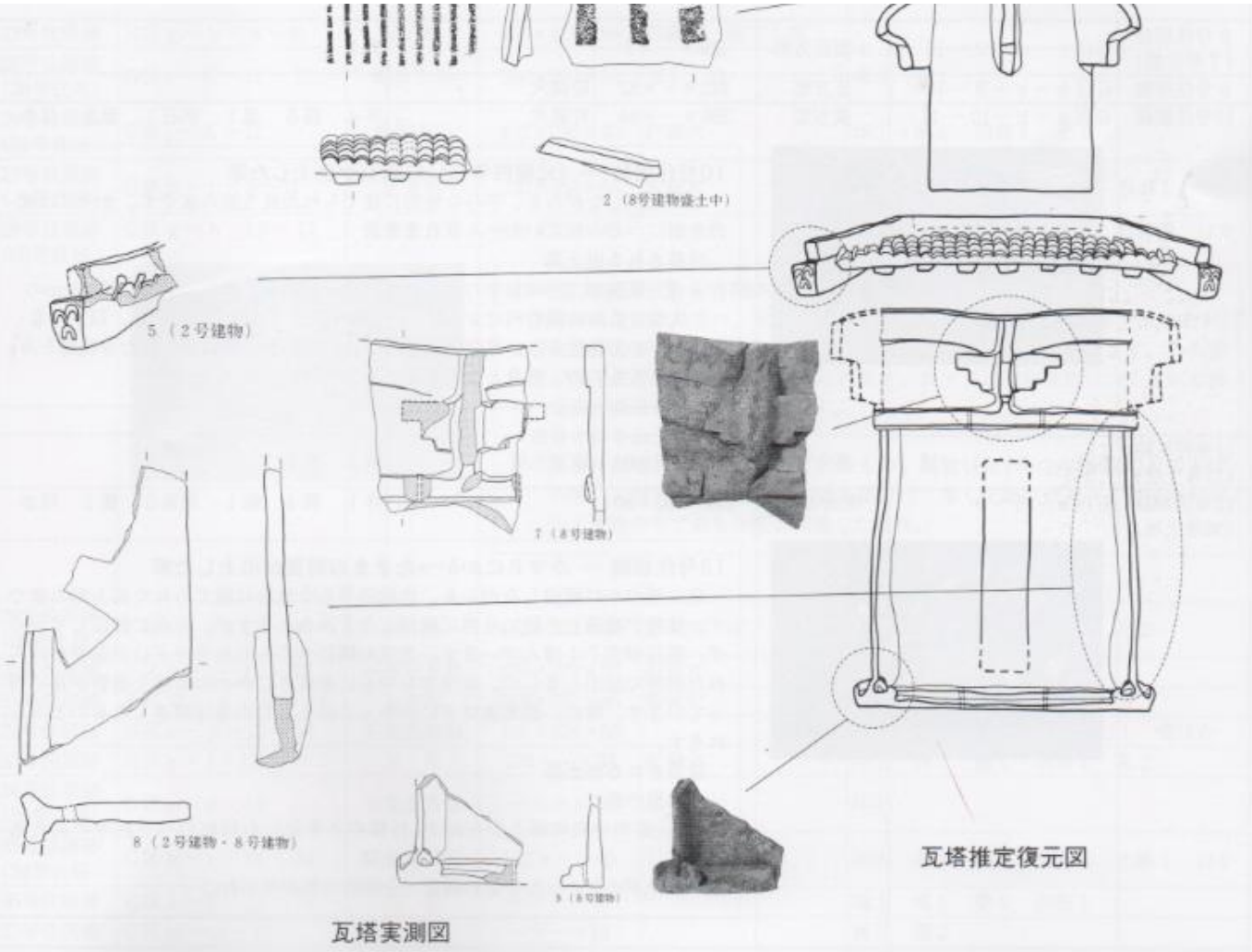
すが、瓦塔を伴っているため、建物内に設置されていたことが想定されます。



焼き物で作られた塔の模型・瓦塔
（前橋市上西原遺跡）

「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より


1（中尾根西区）
6（5号建物基壇盛土中）
3（5号建物・8号建物）
4（2号建物）



「多胡郡　古代寺院の素顔ー黒熊中西遺跡ー」より

請求記号	GB121-E828
タイトル	関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書. 第10集
責任表示	群馬県埋蔵文化財調査事業団編
出版地	北橘村(群馬県)
出版者	群馬県埋蔵文化財調査事業団
出版年	1992.3
形態	184p 図版91p ; 30cm
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 ; 第135集
各巻タイトル	黒熊中西遺跡. 1
注記	群馬県教育委員会,日本道路公団の委託による

インターネットより

多胡碑

特別史跡
多胡碑
■所在地
■指定年月日
史跡
特別史跡
■銘文
弁官符上野国片岡郡緑野郡甘
良郡并三郡内三百戸郡成給羊
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅
宣左中弁正五位下多治比真人
太政官二品穂積親王左太臣正二
位石上尊右太臣正二位藤原尊
■読み方
弁官符す。上野国の片岡郡・緑
野郡・甘良郡并せて三郡の内、三
百戸を郡と成し、羊に給いて多胡郡
と成せ。和銅四年三月九日甲寅に宣
る。左中弁・正五位下多治比真人。
太政官・二品穂積親王、左太臣・正
二位石上尊、右太臣・正二位藤
原尊。
■現代語
朝廷の
国片岡郡
ら三百戸
に支配を
さい。和
左中弁正
よる宣旨
左大臣正
位藤原(

高崎市吉井町池一〇九五

大正一〇(一九二一)年三月三日

昭和二九(一九五四)年三月二〇日

■全長　一五二・五センチ（台石をのぞく）

■重さ　一三七二キロ

■材質　牛伏砂岩（通称　多胡石など）の転石

■碑文　おおむね楷書六行八〇字　丸底彫り系

語訳

の弁官局から命令があった。上野
郡・緑野郡・甘良郡の三郡の中か
を分けて新たに郡をつくり、羊
に任せる。郡の名は多胡郡としな
和銅四(七一一)年三月九日甲寅。
位五位下多治比真人(三宅麻呂)に
である。太政官の二品穂積親王、
位二位石上(麻呂)尊、右大臣正二
不比等)尊。

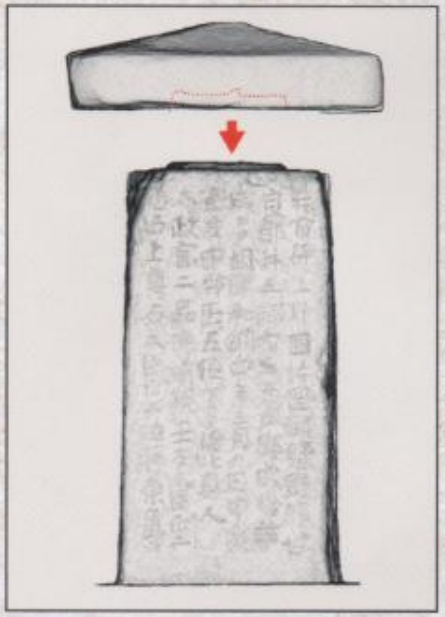
※尊＝敬称

解説

多胡碑は、新たに多胡郡を建てたことを記念した建郡碑です。碑文は、上野国にあてられた公文書をアレンジしたものとみられます。『続日本紀』和銅四年三月辛亥（六日）の条には「上野国甘良郡の織裳・韓級・矢田・大家、緑野郡の武美・片岡郡の山等の六郷を割いて、別に多胡郡を置く」とあり、多胡碑の記述と合致します。

多胡碑は、中世以降の文人・学者の研究対象として長い歴史を有し、その書風も書道史上で高く評価されています。また、地元では「羊太夫伝説」に彩られ、「ひつじさま」として尊敬されています。

笠石、碑身、台石からなる。碑身は末広がりの方柱形で、上面には、笠石底面のホゾ穴に対応する方形の突出部がある。台石は、第二次世界大戦後にコンクリートで巻かれた。



レーザースキャンによる三次元形状計測図

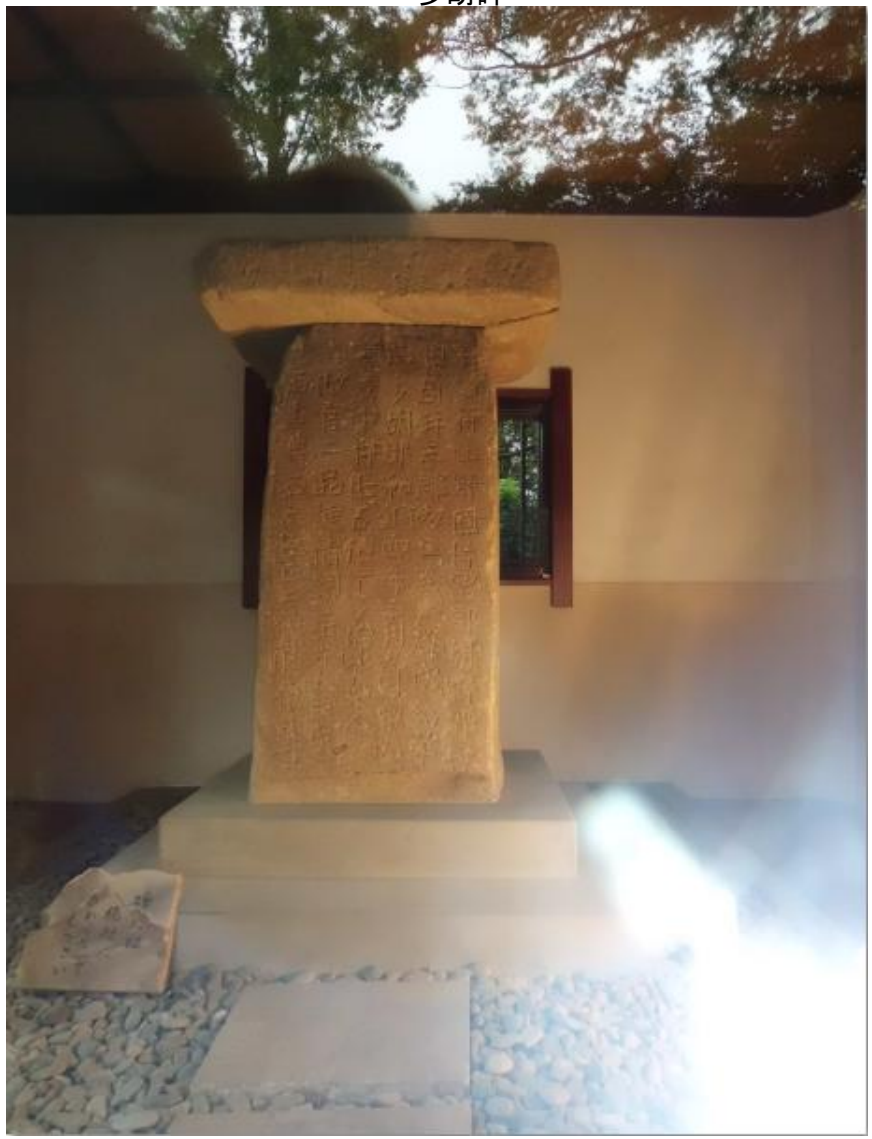
多胡碑の覆屋と特別史跡指定地

南陽台GC
ふれあいの里
中国化薬
小林製作所
南陽台小
陸上自衛隊吉井分屯地
日高リハビリテーション病院
岩崎神社
めざめ保育園
上岩崎公民館
馬庭小
馬庭公民館
古河機械金属
吉井運動公園運動場
馬庭
吉井高
東京精密管
吉井西中
カインズホーム
中島公民館
入野小
信電鉄線
吉井
市役所支所
吉井幼稚園
吉井通町局
昭和工業
吉井東コミュニティセンター
入野中
吉井中央中
西上州やまびこ街道

史跡　多胡碑とある

多胡碑覆屋

多胡碑



古墳もある

… トイレ
… 多胡碑記念館入口
… 身障者用入口
… 多胡碑記念館駐車場
多胡碑
現在位置
お弁当広場
芝生広場
大賀蓮池
古墳
古墳
入口
多胡碑記念館
記念館入口

手前は片山1号古墳、向こうは南高原1号古墳

手前は片山1号古墳、向こうは南高原1号古墳

手前は南高原1号古墳、向こうは片山1号古墳

南高原1号古墳

南高原1号古墳
本古墳は直径17mを測る円墳で、低い基壇を有する二段築成
を呈しています。周囲に堀を巡らせ、墳丘表面には北側を中心に
葺石が残っていました。主体部は南側に入口をもつ横穴式石室
です。石室全長は約8mで、石材は地元の牛伏砂岩を用いています。
築造年代は７世紀代(約1400年前)と推定されます。
●石室断面図
石室は、奥の天井石及び奥壁、左右側壁(袖部を除く)、通路(羨道)の各右側壁下半
(入口は除く)が残っていました。
斜線部は消失箇所を復元。

南高原1号古墳（上毛古墳総覧多胡村115号）

（高崎市吉井町神保259、260、261番地より移築）

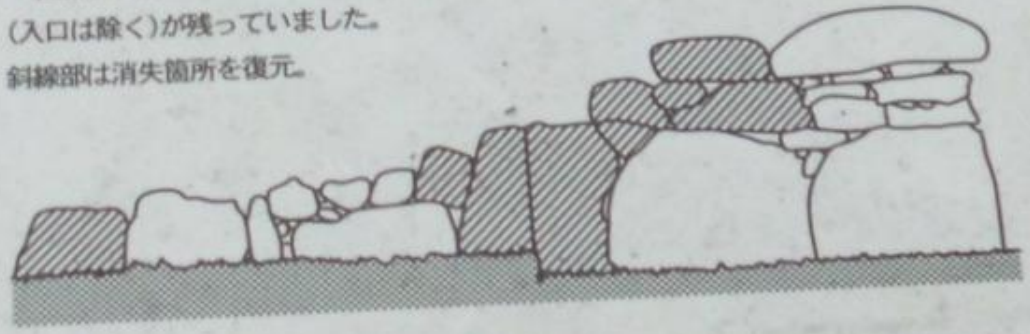
本古墳は墳径17mを測る円墳で、低い基壇を有する二段築成を呈しています。周囲に堀を巡らせ、墳丘表面には北側を中心に葺石が残っていました。主体部は南側に入口をもつ横穴式石室です。石室全長は約8mで、石材は地元の牛伏砂岩を用いています。

築造年代は７世紀代（約1400年前）と推定されます。

●石室断面図

石室は、奥の天井石及び奥壁、左右側壁（袖部を除く）、通路（羨道）の左右側壁下半（入口は除く）が残っていました。

斜線部は消失箇所を復元。



片山1号古墳

片山１号古墳（上毛古墳総覧吉井町65号）
（高崎市吉井町片山117番地より粘土槨を移築）
本古墳は、墳径32.6mを測り、周囲に巡る堀跡を含めると直径約50mを測る円墳となります。主体部は、墳頂中心より南に寄った位置から、8.8mを測る長大な粘土槨を確認しました。粘土槨からは小型倣製の内行花文鏡のほか竪櫛（約40点）、鉄剣、鉄鏃、鉄製斧、石製模造品（斧・刀子・臼玉）、管玉などが出土しました。
築造年代は、４世紀末から５世紀初頭と推定されます。
●粘土槨断面復元図
粘土槨は、全長約8.8m、幅約2.0mの墓壙の中に粘土を敷き、大木を縦半分にして中をくりぬいた割竹形木棺を置き、更に粘土で包んだものが残っていました。
A-A'
木
粘土
●棺内平面復元図
A
A'
竪櫛
鉄製品
石製品
剣
刀子

片山１号古墳（上毛古墳総覧吉井町65号）

（高崎市吉井町片山117番地より粘土槨を移築）

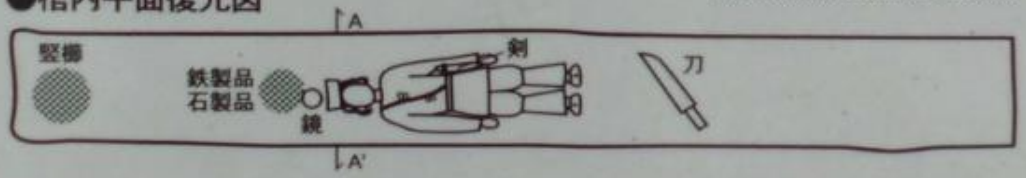
本古墳は、墳径32.6mを測り、周囲に巡る堀跡を含めると直径約50mを測る円墳となります。主体部は、墳頂中心より南に寄った位置から、8.8mを測る長大な粘土槨を確認しました。粘土槨からは小型倣製の内行花文鏡のほか竪櫛（約40点）、鉄剣、鉄鏃、鉄製斧、石製模造品（斧・刀子・臼玉）、管玉などが出土しました。

築造年代は、４世紀末から５世紀初頭と推定されます。

●粘土槨断面復元図

粘土槨は、全長約8.8m、幅約2.0mの墓壙の中に粘土を敷き、大木を縦半分にして中をくりぬいた割竹形木棺を置き、更に粘土で包んだものが残っていました。

●棺内平面復元図



粘土槨古墳

多胡碑記念館

多胡碑記念館
定礎

多胡碑のレプリカ

群馬県埋蔵文化財調査センター（渋川市）

群馬県埋蔵文化財調査センター
Gunma Archaeological Research Center
群馬県埋蔵文化財調査事業団
Gunma Archaeological Research Foundation
発掘情報館

県議会 厚生文化常任委員会
駐車場 右折

発掘情報館

黒熊中西遺跡のパネル

■黒熊中西遺跡（多野郡吉井町黒熊）
上信越自動車道関連で発掘調査された黒熊中西遺跡では、丘陵斜面を造成して建てられた平安時代（9世紀末）の寺と集落の一部が発見されました。この寺院は瓦葺きの本格的なもので、独特な表情の鬼瓦なども出土しました。

「古代建築技術にせまる」

古代建築技術にせまる

2500年遡った木材加工技術の使用

1997年に富山県小矢部市の桜町遺跡で洪水層に埋まった縄文時代の建築部材が見つかりました。4000年以上もの間、水や砂に浸った状態にあったことがこの発見につながりました。この建築部材の中には何通りもの「継ぎ手」と「仕口」があり、このうち「渡り顎仕口」と呼ばれる加工は、607年創建の法隆寺で使われているのが最古とされていたので、実に2500年もその使用が遡ったことになります。

縄文人がノコギリやノミといった大工道具の切れ味を知ったら、どのような感慨にふけることでしょう。豊かな木材資源を用いて、金属の道具をもたない縄文人が、石器を使って日本古来の伝統建築に通じる木材の加工をおこなっていたことは驚くべきことです。

縄文時代の直径１mの大きな柱穴

「継ぎ手」と「仕口」の加工技術
―プレカット加工技術まで―

桜町遺跡でみつかった部材と復元高床建物

家形埴輪/神保下條遺跡(高崎市)

瓦塔/上西原遺跡（前橋市）

鬼瓦/黒熊中西遺跡

軒丸・軒平瓦/黒熊中西遺跡

←

地鎮具/黒熊中西遺跡

↓

←

古代寺院から出土したうつわ/黒熊中西遺跡

古代の瓦の使い方

黒熊中西遺跡から出土した壺
↓

家形埴輪/下高瀬上之原遺跡（藤岡市）